薩摩硫黄島の火山活動解説資料（令和８年 10 月）

福岡管区気象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方気象台

硫黄岳火口では、28日13時07分と14時15分に噴火が発生し、噴煙は最高で火口縁上900ｍまで上がりました。大きな噴石の飛散や空振は観測されませんでした。噴火が発生したのは、2026年５月17日以来です。なお、噴火の前後で地震活動や地殻変動等に特段の変化はみられていません。

火山性地震や火山性微動の発生状況に特段の変化はありません。

火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は１日あたり1,000トン前後の状態が長期的に継続しており、時折噴煙が高くなるほか、夜間に火映を観測しています。長期的には噴煙活動や熱活動が高まった状態が続いていることから、硫黄岳火口周辺に影響を及ぼす程度の噴火が発生する可能性があります。

硫黄岳火口の中心から概ね0.5kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。また、火山ガスにも注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

令和３年４月８日に火口周辺警報（噴火警戒レベル２、火口周辺規制）を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図１、図２-①、図３-①）

硫黄岳火口では、28 日 13 時 07 分と 14 時 15 分に噴火が発生し、噴煙は最高で火口縁上 900m まで上がりました。大きな噴石の飛散や空振は観測されませんでした。噴火が発生したのは、2026 年５月 17 日以来です。三島村役場硫黄島出張所によると、噴火に伴い、島内の集落で少量の火山灰が確認されました。これらの噴火以外では、白色の噴煙が最高で火口縁上 700m（９月：1,000m）まで上がりました。また、夜間に高感度の監視カメラで火映を観測しました。

・地震や微動の発生状況（図２-②③、図３-②～④、図４）

火山性地震の月回数は 237 回（９月：192 回）と少ない状態で経過しました。このうち、高周波地震の月回数は 85 回（９月：71 回）でした。震源が求まった火山性地震はありませんでした。

火山性微動は観測されていません。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。
https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php
次回の火山活動解説資料（令和８年 11 月分）は令和８年 12 月８日に発表する予定です。
本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。
https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/kazan/kazanyougo/mokuji.html
この資料は気象庁のほか、国土地理院、東京大学、京都大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び三島村のデータも利用して作成しています。
資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50ｍメッシュ（標高）』を使用しています。

・火山ガスの状況（図２-④、図３-⑤）

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、三島村及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、１日あたり 400～900 トン（９月：観測値なし）でした。長期的には１日あたり 1,000 トン前後の状態が継続しています。

・地殻変動の状況（図５、図６）

GNSS 連続観測では、島内の一部の基線で 2015 年頃から、薩摩硫黄島と竹島の間の海域を中心とした膨張性の地殻変動に対応すると考えられる長期的な縮みの傾向がみられています。

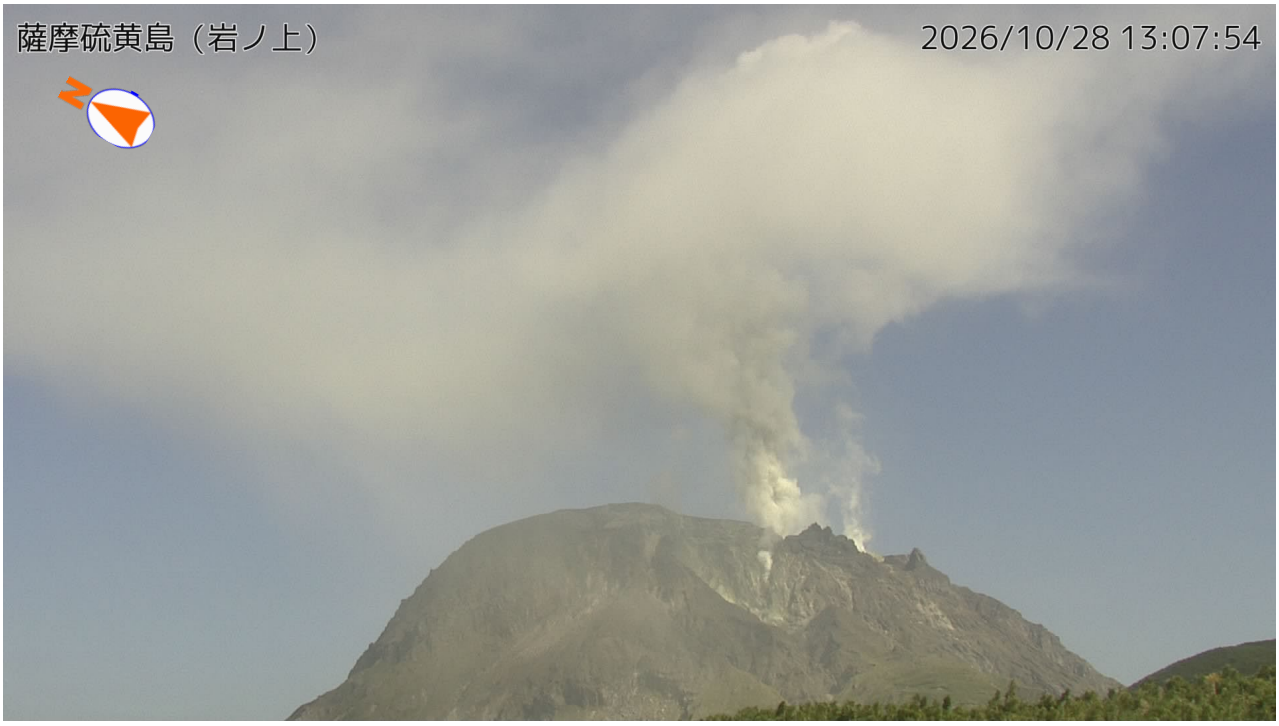


図 1-1 薩摩硫黄島　噴火の状況（10 月 28 日 13 時 07 分、岩ノ上監視カメラ）

硫黄岳火口では、28 日 13 時 07 分に噴火が発生し、噴煙が火口縁上 900ｍまで上がりました。



図 1-2　薩摩硫黄島　火映の状況（10 月５日、岩ノ上監視カメラ）
夜間に高感度の監視カメラで火映（白破線内）を観測しました。





図 1-3　薩摩硫黄島　集落における火山灰の状況（10 月 28 日）
噴火に伴い、島内の集落で少量の火山灰が確認されました。
※写真は三島村役場硫黄島出張所提供

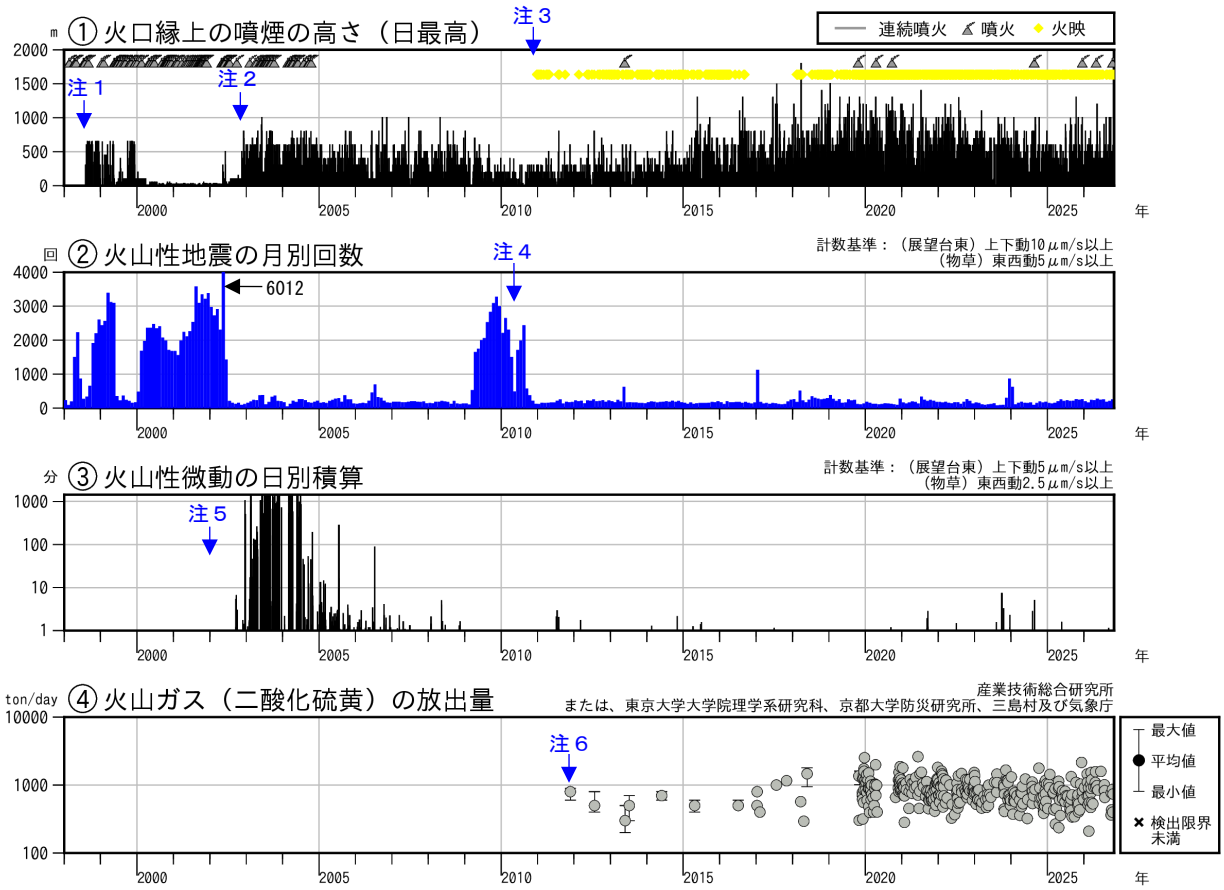


図２　薩摩硫黄島　火山活動経過図（1998 年１月～2026 年 10 月）

注１　1998 年８月１日：三島村役場硫黄島出張所から気象庁へ通報開始。
注２　2002 年 11 月 16 日：気象庁が設置した監視カメラによる観測開始。
注３　気象庁が設置した監視カメラの高感度化により火映の観測が可能となりました。
注４　2010 年１月から７月にかけて、地震計障害のため火山性地震及び火山性微動の回数が不明の期間があります。
注５　火山性微動の日別積算時間のデータは 2002 年以降。
注６　2011 年 11 月 26 日：気象庁による火山ガス（二酸化硫黄）放出量の観測開始。2019 年 12 月から東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、三島村及び気象庁による観測開始。

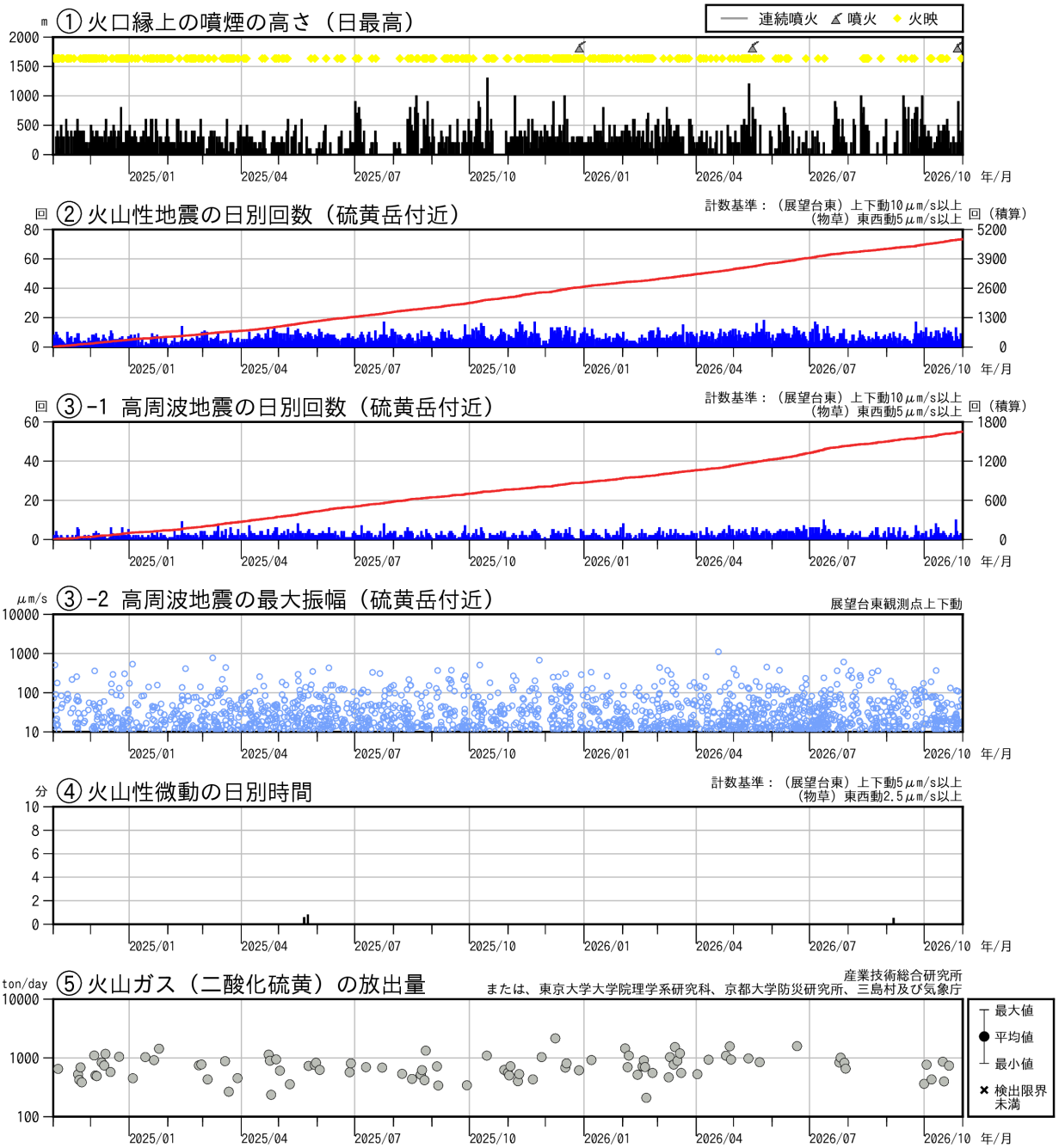


図３　薩摩硫黄島　火山活動経過図（2024 年 11 月～2026 年 10 月）

＜10 月の状況＞

・硫黄岳火口では、28 日 13 時 07 分と 14 時 15 分に噴火が発生し、噴煙は最高で火口縁上 900m まで上がりました。これらの噴火以外では、白色の噴煙が最高で火口縁上 700m（９月：1,000m）まで上がりました。
・硫黄岳火口では、夜間に高感度の監視カメラで火映を観測しました。
・火山性地震の月回数は 237 回（９月：192 回）と少ない状態で経過しました。
・高周波地震の月回数は 85 回（９月：71 回）でした。振幅の大きな火山性地震が時々発生しました。
・火山性微動は観測されていません。
・火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、１日あたり 400～900 トン（９月：観測値なし）でした。長期的には１日あたり 1,000 トン前後の状態が継続しています。

火山性微動は、展望台東観測点上下動 5.0μm/s 以上、物草観測点東西動成分 2.5μm/s 以上のいずれかの基準を満たすものを計数しています。

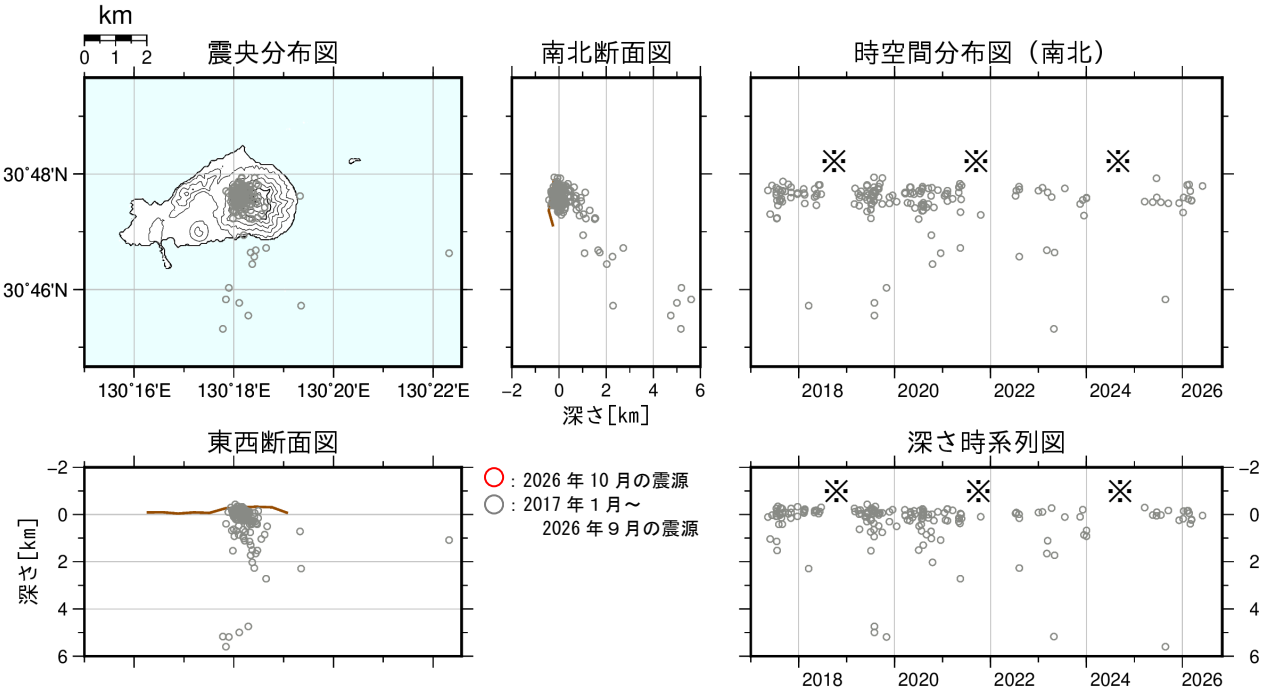


図４　薩摩硫黄島　火山性地震の震源分布図（2017 年１月～2026 年 10 月）

＜10 月の状況＞

震源が求まった火山性地震はありませんでした。

※地震計障害のため、2018 年６月下旬から 2019 年２月下旬まで、2021 年６月中旬から 12 月中旬まで及び 2024 年２月下旬以降の期間では、検知力や震源決定の精度が低下しています。

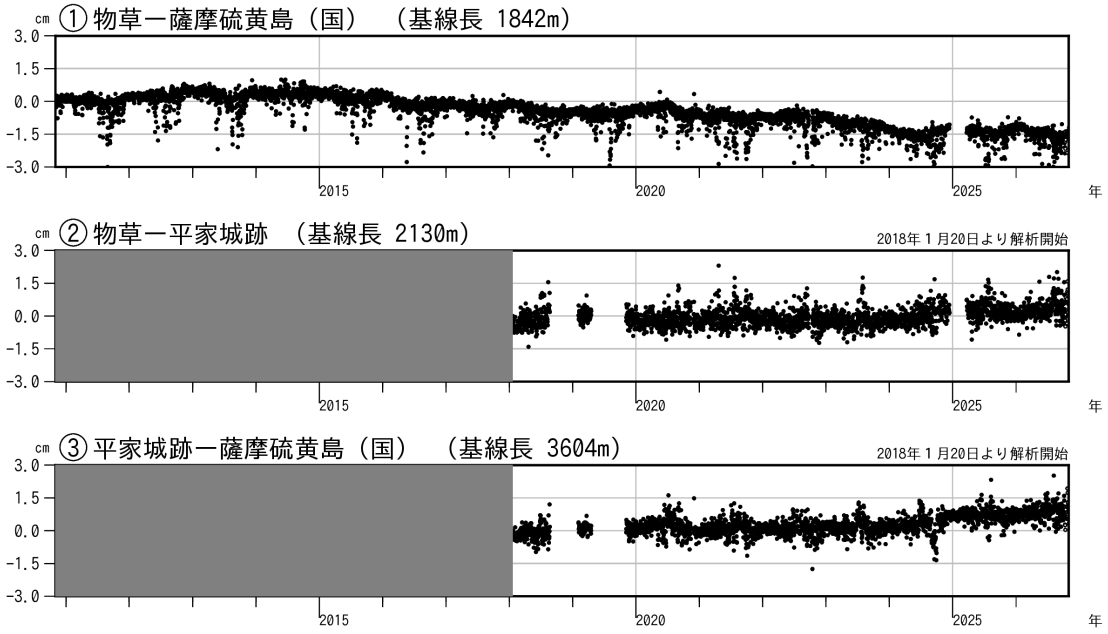
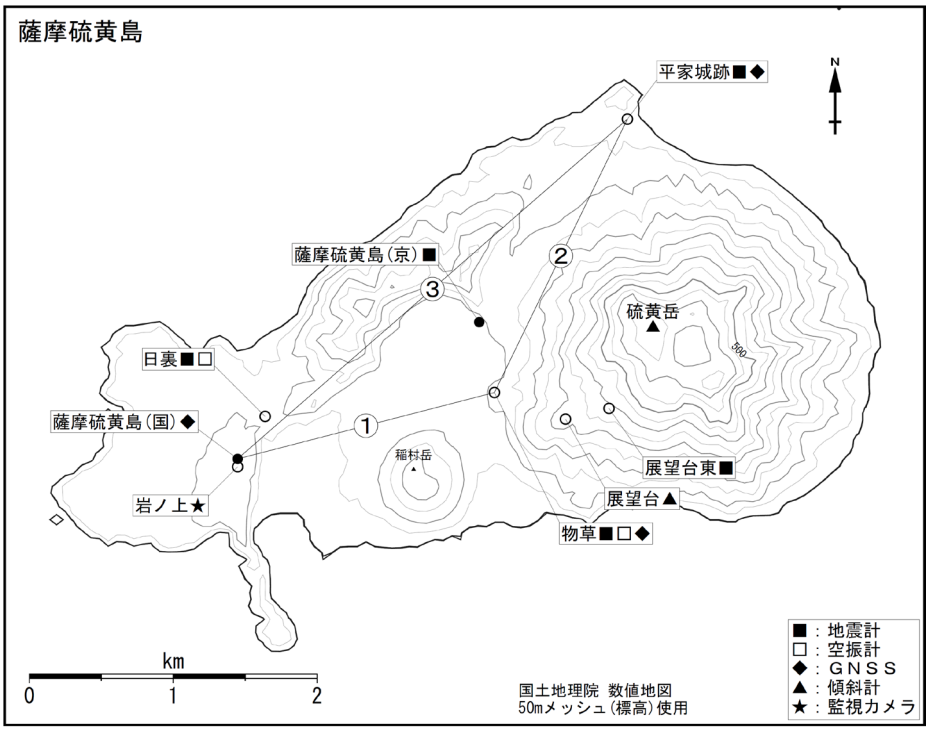


図５　薩摩硫黄島　GNSS連続観測による基線長変化（2010 年 10 月～2026 年 10 月）

GNSS連続観測では、島内の一部の基線（①）で 2015 年頃から、薩摩硫黄島と竹島の間の海域を中心とした膨張性の地殻変動に対応すると考えられる長期的な縮みの傾向がみられています。

この基線は図６の①～③に対応しています。
基線の空白部分は欠測を示しています。
（国）：国土地理院



小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
（国）：国土地理院、（京）：京都大学

図６　薩摩硫黄島　観測点配置図と GNSS 連続観測の基線番号

白丸（○）は気象庁、黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
（国）：国土地理院、（京）：京都大学